

## あとがき

本論は、2000年4月に琉球大学法文学部に着任して以来の、私の沖縄研究の最初の集大成である。それまで文化理論やビジュアル文化、テーマパーク、空間論、観光論といった領域に関心をもっていた私だが、沖縄に来て海洋博や<青い海>の沖縄イメージといったテーマにつながられたのは、誠にラッキーであった。

2000年の九州・沖縄サミットや2001年の「ちゅらさん」などで沖縄への注目が集まってきた中で、沖縄にいる側から、何らかの情報を発信したいという気持ちがあった。2002年はちょうど復帰30周年でもある。その意味でも復帰前後、70年代における観光リゾート化のプロセスを詳細に記述することを通じて、今日の<海><亜熱帯><文化>に代表される沖縄イメージを、より厚みのある想像力をもって新たな観点から理解する一助となれば幸いである。

ところで、私自身の沖縄との最初の関わりといえは、1996年、琉球大学で開催された日本社会学会大会に参加したことであった。お恥ずかしい笑い話だが、あのとき私が学会発表したのも、やはり「はるか南」の沖縄へ旅行したい気持ちが強かったことが大きい。その私が数年後には、こうして沖縄で働き、生活しながら、本論を書くに至っている。これは、当時は全く予想しない展開である。あのとき、現在の同僚スタッフの方々が主催運営に忙しく走り回っていた最中に、私はエキゾチックな憧れのまなざしで、<沖縄>を求めて来たのだった。そういうツーリズムと沖縄の関係はどこから来たのか、より客観的に知り、理解したい気持ちが、沖縄に移住してからの私の中に自然に芽生えていった。

もっとも、沖縄において、基地や開発のリアリティは依然根強い。従来の社会科学的な研究やジャーナリズムの関心も、これらに集中する傾向があったことは、ある意味で必然的なことであった。とはいえ本論は、沖縄のイメージ・観光に焦点を当てる中で、「社会的事実をよりトータルにとらえる」社会学の視座を確保することに重点を置き、基地・開発のリアリティもその中に位置づけ、関係づけてきた。こうした試みは、沖縄研究の中でもほとんど類例がなく、全くの手探りの中で進めていく作業であった。そして実はこれによって、<沖縄>をめぐる語りや視点を、より多様化・多層化したいというのが、私のねらいの一つであった。だから今回、<沖縄>をめぐる語りにおいて繰り返し問われる「出身地」の問題にも、あえてこだわらない立場をとった。

また、外国の理論の輸入に偏りがちなカルチュラル・スタディーズや、経営論に偏りがちな観光研究の潮流に対しても、これらの領域の具体的なケーススタディとして、新たな一石を投じる目的からも、本論は書かれている。その意味で本論はささやかながら、「沖縄研究・文化研究・観光研究の革新」を志向してみたが、いかがだろうか。その是非は、みなさんの評価を静かに待つことにしたい。

さて、本論が形をなすまでには、実に多くの方々のお世話になった。ここでは、そのうち代表的な方々の名前だけ挙げさせてもらうことになる。まず何とんでも、早稲田大学大学院の指導教官・佐藤慶幸先生である。1994年、私が24歳のとき以来、先生には社会学の研究面だけでなく、人格形成の面でも多くのことを教わった。大学院生が研究を自由に進めることを認めつつも、我慢しながら見守ってくださる先生のまなざしがなければ、

現在の私はありえなかつたろう。そして、先生のご退官直前に本論の提出が実現し、わずかばかりの恩返しができることは、誠にうれしい限りである。この場を借りて、佐藤先生の長年にわたる業績の数々に敬意と感謝の意を表すとともに、今後のさらなるご活躍をお祈りしたい。

琉球大学法文学部人間科学科社会学専攻・社会学コース（プロパー）のスタッフである安藤由美氏・鈴木規之氏・野入直美氏は、2000年から最も日常적으로お世話になっている方々である。そのご理解とご協力がなければ、教育と研究執筆の両立はなしえなかつた。また、「モダニティの社会学」読書会での田仲康博氏・長谷川裕氏・蔦森樹氏との熱く濃密な議論は、本論の執筆にとっても大いに刺激になった。この会で緻密に読み込んできたギデンズの視点は、本論の理論的ベースを作り上げている。与儀武秀氏との泡盛を呑みながらのいつもホットな議論も、本論を支えている。

大学院時代からのみなさんのご協力や励ましも、大いに力になった。特に、岡本智周氏・熊本博之氏には、東京からの貴重な情報・資料の提供を受けた。また、沖縄と東京で互いに行き来するたび、彼らと繰り返し呑んで語らえたことも、大いに気分転換になった。彼らをはじめ、「佐藤先生研究室特別ゼミ」で本論の中間報告を数回行った際にも、ご多忙の中参加して、私の長い発表にコメントをくださったみなさんにも、感謝の念はたえない。さらに、田所承己氏は、大学院時代に最も議論し、刺激し合った友人である。院生時代の理論形成や文化社会学の方向づけは、彼との議論や共同作業の中から確立されてきた。その意味では、彼との語らいなくしては、本論が形をなすこともありえなかつたろう。また、文化研究や博覧会・消費社会などの視点の形成においては、カルチャースタディーズ主宰・三浦展氏の影響も大きい。

本論の資料の収集に際しては、琉球大学附属図書館・沖縄国際大学附属図書館・浦添市立図書館・沖縄県立図書館・早稲田大学附属図書館・青山学院大学附属図書館・日本体育大学附属図書館等の職員の方々にお世話になった。また海洋博については、東京の雑貨店「EXPO」の経営者・鴻池綱孝氏から大量の資料・グッズの提供を受け、大いに参考になった。この他、章ごとの謝辞については、各章末に掲載している。

なお、本論の基本的な視点や内容は、琉球大学法文学部の2000-2年度開講科目「文化社会学」および2001-2年度開講科目「社会学史」の授業を行う中で、少しずつ形成されていった。教えることは同時に、教えられることでもあった。この2年半は、本論とまた私自身が、受講生のみなさんとともに成長していくプロセスであった。若き琉大生との、時に笑いながらのユーモアトークが、時に教員の立場を忘れての大激論が、本論の中身を豊かにしてくれている。その意味で本論は、受講生のみなさんとの協同の産物であったと言っても過言ではない。

最後に、大阪の実家の父・母、東京の妻方の父・母には、この論文執筆に際しても大にお世話になり、心配をかけた。そして、本論執筆の期間中、最も長い時間を共に過ごし、サポートし続けてくれた妻・真理に、この場を借りて、感謝の意を捧げたい。